

令和4年度
学校だより

令和5年
3月7日

しおかぜ

佐渡市立
高千小学校

「思いやりと信念をもって根張れる子」を実現を目指す学校

No. 13

不自然な「話し合い」～音声言語と文字言語～

校長 白澤 道夫

寒波もいつの間にか過ぎ去り、ここ数日は気温がかなり上がってきたためか、春の訪れを強く感じます。いよいよ、令和4年度の「締めくくりの時期」がやってきました。

今年度1年間を振り返ると、思い浮かぶことは「ことばまみれ」を合言葉に取り組んだ「言葉力」の向上です。2学期後半あたりから、授業中や休み時間等、学校生活の様々な場面で言葉をあやつり、いきいきと話す子どもたちが増えました。「かっこいい」です。

1年間の取組で、子どもたちの姿をとおして、気付かされたことがありました。

それは、本たより2号（「ことばまみれ」の学校）で記させていただいた「言語」には「音声言語」と「文字言語」があるということです。

考えれば当然なのですが、十分に意識していただろうかと反省しているところです。

私は、当校を含め、様々な学校で、授業の様子を見せていただく機会があります。

どの授業も、教師が、子どもたちに力が付くように、伸びるように実践しています。

ただ、時折、気になることがありました。話し合いの場面なのですが、話す側（発言者）は、タブレットの画面を見ていて、グループ内の相手を見て話すことがない（画面の文字を読んでいる？）。聞く側も同様で、タブレットを見ながら相手の話を聞いている。

さらに、隣同士でタブレット内のチャットで「話し合い」をしている場面も見ました。

これは、話し合いなのでしょう。正直、私には、とても「不自然」に思えたのです。

もちろん、これは、数年に渡り、私たちの生活を大きな影響を与えた新型コロナウイルス感染症による会話の制限等があったためだと推測できます。

しかし今後、状況は変わります。おそらく、対話による会話が、いっそう頻繁に行われるでしょう。それは、文字よりも音声による、人が欲するコミュニケーション本来の姿なのです。そう考えると、学校においても、音声言語による「話す・聞く」の学び、経験を一層進めていかなければならないと思うのです。

先日、その思いを再認識する授業を見ました。

「2人組での話し合いの場面」で、始めのうちは、例の「タブレットに話す」様子が見られたのですが、時間が経つに連れて、（2人組のうちの）片方が相手に向けて話しかけ、それを受けて、相手も応えるようになりました。その後、タブレットは、相手の考えや記述を確認するだけに用いられるようになり、時間の大半を「お互いに向き合いながら対話」することに費やしていました。子どもの学びに向かう姿勢が、実に自然な流れで「（文字と音声を交えながら）言語で考える」場面を生み出したのです。

この授業では、子どもが、「文字言語では、（自分の考えたことを）相手に伝えにくい」旨の発言をしていました。確かに、文字言語または音声言語の別なく、言語は不完全なものです。（だからこそ、身振り・手振り・表情等の非言語の意味があります。）

「ことばまみれ」には、言語（音声・文字）と非言語の「いい塩梅」が必要なのです。

このことを糧にして、次年度「ことばまみれ」の学校～セカンドシーズン～を迎えます。